
三人の魔女 “ 夢の射影 ” 編

ベイカーベイカー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三人の魔女 “夢の射影” 編

【Nコード】

N6580Y

【作者名】

ベイカーベイカー

【あらすじ】

約千年物もの昔、滅びを迎えた世界から魔術師が地球へ逃げ延びてきた。

彼らは魔力の枯渇を防ぐため、魔術を秘匿し、独占し、歴史の裏側で暗躍する。

そして今、地球は科学万能の時代二十一世紀を迎え、完全に彼らの存在を忘れてしまっていた。

人々は知らない、血を血で洗う、凄惨な歴史の裏側の残酷で無残な死と隣り合わせの世界を。

そんな現代で、かつて最強の魔術師が作った凶悪なマジックアイテムが某県木賀市内より発見された。ただの高校生、河戸真水はそんな血混みな世界に巻き込まれていく。

ありとあらゆる魔術に硝煙漂う銃器、何でもありのカオスティック現代ファンタジーが、今綴られる。（注意：この作品はArcadia h i a様で連載し完結した作品の改定版です。）

第一話 日常の予鈴（前書き）

作者は、Arcadiaで改定前の作品を投稿している人物と同一です。

勘違いする人はいないと思いますが、念のため。

本当ならあっちの名前で投稿しようと思ったのですが、それだところちでも投稿しているので紛らわしいので。

それと、この作品はここで投稿している同時連載中の『魔族の掟』と同じ世界観と、時間軸を有しております。

第一話 日常の予鈴

「え・・・？」

河戸真水は、混乱の極致に居た。

「（こういうときは、自分の置かれた状況を整理するんだ。）」

自分は弟の姿が家に見えずに、呼んでも居ないことに不審を抱いた。

この時、時間は深夜十二時を回っていた。

そもそも、今日、自分が高校から帰ってきて一度も弟とは顔を合わせていない。

弟は、今日は中学校から帰ってきてすら居なかったのだ。

夕食の担当は弟なので、今日の食事はわびしかったのを覚えている。

ふと、近頃起きている、連続猟奇殺人事件が、付近の市内で起こっている言うニュースが頭を過った。

もしかや弟は殺人鬼に襲われたのでは？

そう、自分は弟が心配になって探しに出たのだ。

何をやっているんだあいつは、と思いながらも、自分ひとりあえず近所のコンビニにまで歩くことにした。

その最中で、ドシン、と何か巨大なモノが落下する音が聞こえた。

それも、真後ろだった。振動が、自分の所までやってきて、自分は驚いて振り向いた。

満月を背に、巨大な何かが立って居た。

何かが、叫ぶ。

獣のように叫んだ。

ように、ではなかった。

獣だった。巨大な、身長にして四メートルはある、熊だった。

この近くに、山は無いし、熊は住んで居ないはずだ。

それでも、異常だった。あんな大きな熊は、俺は知らなかった。

自分は次に恐怖を覚えた。

多分、悲鳴を挙げていたと思う。

だが、長い獣の咆哮は自分の悲鳴はかき消される。

死ぬ、と思った。

逃げよう、という選択肢すら思い浮かばなかった。

殺されるだろう、と確信してすらいた。

だが、その時、自分の前に、立ちはだかる人物がいた。

こともあるうちに、その人物は近くの家の屋根の上からやってきたのだ。

自分は、俺は・・・彼女を知っている。

「吉中・？」

彼女は今年の春、高校に進学すると同時にクラスメイトになった少女だった。

俺はますます混乱して、今日一日を思い返していた。

ここは木賀市。

首都圏の隅にある何処にでもあるような市である。

周囲に目立った施設が無い所為か、わりとひっそりとしていて人工も13万人。割と一般的な数字である。

昔から酷い天災に遭う事も無く、とても緩やかで安定した所だ。

町を横切るように木賀川が流れており、現地の人々から、川から北

を上流区、川から南を下流区、と呼ばれており、特に深い意味は無いが、上流区には首都圏の影響を受けているのか現代風で、下流区は土地が安い為か、裕福ではない人々が住んでいて、奥の方に行けば、時代に取り残されたような家も見えてくる。

その下流区に、我が兄、河戸真水は住んでいた。

少々、変わった印象を受ける名前で中学時代に“淡水”といじめを受けていた、という経歴を持つ。

歳は16になったばかりで、先月から近くというだけの理由で私立の木賀高校に通っている。

全く、親の金を何だと思っているのだろうか。

家族編成はこの時代にしては珍しく、彼と今年中学生に上がったばかりの義弟（つまり僕のことである）の二人暮らしだ。

両親は、既に他界している。

遺産が思ったより多かったのが幸いし、何とか一軒家を売り払わずに済み、真水が成人するまで持ちそうではある。

と、一口に説明するのは容易いが、それだけで当人の本質を知ろうなど、愚かにも程があるだろう。

「それから・・・」

僕はシャープペンシルを嬉々して進める。

バシン。

「ふぎやー!!」

軽い衝撃。

ノートを丸められた物で叩かれたらしい。

「なにすんだよ、兄貴。」

僕はそんなことをした唯一の家族に目を向けた。

「ウエルク、レポートに要らない事を書こうとするな。」

やれやれ、と兄貴は息をついた。

僕と違って平凡な面構えである。

スレて金髪に染めたりしても、別に背も高い訳じゃないので微妙な感じになるのを分かっているのだ。

兄貴はその辺の馬鹿な学生連中と違って、身の程を弁えているようだった。

ちなみにレポートの題材は、私の家族についてである。

倫理の授業の課題だ、小学生の課題だろこれ、と僕のクラスの皆がそう思ったことだろう。

「それで兄貴、何のようさ。」

「朝飯だよ、今日の当番は俺だからな。」

「ああ、犬の餌か。大して上手くないくせに、よく料理なんて作る気になれたね、兄貴。」

もう一発、ノートを丸めた奴で頭を叩かれた。

俺は不満そうに口を窄めて尖らしてる義弟を見下ろし、溜息を吐いた。

河戸ウエルク。

俺の父親が十年前に養子として貰って来た5つ下の義弟である。

茶髪を短く切り、釣り目には眼鏡がよく似合っている。

いつも自信ありそうに唇を吊り上げ、意味も無く兄貴の俺を見下したような態度で話すませた子供である。

名前の通り、日本人では無く、欧米人が英国人あたりだと、真水は推測している。

なぜ推測かというと、そんな詳しい事は知らされずに父は他界したからである。

知りようが無い。それが二年前だ。

欧米では人種のサラダボウルなんて言われているくらいだから、自分の起源を知りたがるのは普通らしいが、ウェルクは全くそんな様子を見せない。興味無いのだろう。

親父は滅多に帰ってこない。どこかの大学で考古学の教授をしているとかで、収入には困らなかったが、一年に帰ってくるのは数回だったのは覚えている。

そんな親父が急に外国人の養子をもたらしてきたのだから、当時は親父は御袋と大喧嘩したのを覚えている。

最終的にDNAの検査までしたのを覚えている。

結果が出るまで家の空気は最悪だったのを、幼いながらその時の居心地の悪さを忘れていない。

そんな紆余曲折があつて、俺はこの弟が苦手だった。

嫌いではない。憎まれ口を叩くし、嫌みったらしい性格でネチネチと他人の失敗を責めたりするが、こいつは今俺の唯一の家族なのだから。

こいつがただのガキだったら、俺はこいつを愛せたのかもしれない。

そう、ただのガキなら。

ここは、亡き父が生前使っていたと思われる書斎である。

あるのは入り口と四畳間程度の室内に机、あと本棚の壁である。そこにぎつしりと、本が押し込まれている。

真水は横に積み上げられている何処の言葉か分からない本を見た。この義弟は、探求心が貪欲と言っていいほど旺盛で、この部屋の哲学書（らしいが、俺は一度も開いたこともない）を書いた人物に共感し、それからずっと籠りっぱなしである。

しかも、後で聞いた話だが、内容はとても笑えるような代物ではない。

現代で言えば、オカルトや、ミステリックな内容だ。

それから言うもの、この本たちはウエルクの性格に多大な影響を齎したと思われる。

所謂、天才なのだ。

話の内容は時々、真水でさえついていけない事もある。

晩年、親父は気が触れていた。

親父は死ぬその前日まで、ウエルクにつきつきりで勉強を教えた。

親父がウエルクを連れてきてから、親父はよく俺をそっちのけでウエルクに勉強を教えていたが、親父は御袋が死んでも葬式すら開かずウエルクに勉強をさせていた。

当時俺は小学二年になる頃で、人が死んだら葬式をするくらいは知っていたし、幼心でどうして御袋を蔑にするのか聞いたこともあった。

親父は何も言わなかった。

後で知ったことだが、親父は学会で狂人扱いされていたらしい。

当然、子供だった俺は納得いかない。何度も何度も親父に問い詰めた。

親父は、そんな俺がうつとおしかったのだろう。ついにある一言を俺は引きだした。

「お前とウェルクは違う。あいつは、神の子なんだ。」と。

その日から、俺は親父と一言も話さなくなった。

ウェルクは一日の大半をここで過ごし、最近はここで寝る事もしばしば。

今日も、真水はその不健康な義弟の様子を、朝食を作ったと言う体で見に来た次第である。

「勉強も良いが、早く寝ろといつも言ってるだろ。」

頭の中はともかく、お前の体はまだ子供なんだからな?。」

「わかってるよ、僕だって睡眠くらい取るし、食事だってする。そもそも、生活力の無い兄貴が言っても説得力が無いよ。」

そう言つて、ウェルクは非難する様な目付きで、俺を見た。
確かに俺に生活力は無い。しかし、自分の部屋くらいは片付けるし、洗濯くらいは手伝ったりする。

・・・それ以外、俺は全然駄目だが。

「ああ、そうだとも、だからこそ、お前に倒れられたら困るんだ。」
何せ、こいつが風邪をひいたら看病するのは俺だからだ。
そんな俺の心境を知る由も無く、ウェルクはあからさまに嘲笑を浴びせてきた。

「はぁ・・・まったくダメだねこのクズ兄貴。」
「人のダメっぷりを再確認して喜んでいるクソガキに言われたくないな。」

結局、それから兄弟喧嘩が30分に及んだ事を追記しておこう。

翌日、起床。

昨日は日曜日だったが、今日は月曜日である。

「・・・・・・・・」

きつちりと定時に起き上がった真水は、六畳間を見渡し、何も言わずに着替える。

部屋の中は男らしい生活感の溢れる散らかり様で、二週間に一度は掃除しているが、三日も持った試しがない。

散らかった物を踏まないように部屋の外に出ると、洗面所に向かって顔を洗う。

うがいをしてから歯を磨いてキッチンに向かうと、いつもの通り二人分の朝食がテーブルに並べられていた。

ハムエッグに牛乳とトーストと、洋風朝食の概念を集約したような当り障りの無いメニューを頬張り、目の前の義弟に目を向けた。

「朝食ぐらい、本を放せ。」

真水が言った。半眼で義弟をにらみながら。

目の前で、ウエルクは片手で食べれる故か、サンドイッチを食べながらハードカバーの本を読んでいた。

相も変わらず、何処の言葉だか分からないタイトルであった。

少なくとも、英語では無いのは分かる。ゆとり世代だろうがそれくらい判別はつくのである。義務教育万歳。

「一分一秒も惜しいの。ベートーベンだって、生まれてから初めて作曲を始めた5歳までの月日すらも惜しんだんだ。」

「そうかよ。」

明日使えないかもしれないムダ知識が増えた事を感謝しつつ、真水はもう注意を止める事にした。

ここ最近、ウエルクはより一層読書の時間が延びている。

三月頃は普通に過ごしていたのに、四月の中旬頃になると、現在のように寝る間も惜しんで読書を続けている。

やはり、中学生になって人生の目標でも見つけたのだろうか。

そうならば、兄として喜ばしい事なのだが。

真水は、ウエルクの読んでいる本に目を向けた。

読んでいる本が、あの父の書斎の本棚に収められている異言語の本と、共通しているのだ。

一度、読んでいる本のタイトルを聞いたところ。

「え、この本のタイトルだって？」

□（理解

不能な単語の羅列）だよ。」

全く理解できなかった。

むしろ、頭の方が拒絶したと言った方が近い気がする。

そんな本を、平均程度の学力しかない真水が理解できるはずも無いのだった。

ウェルクは、親父が言った通り、神童だった。

朝っぱらから疲れつつ、読書に熱中する義弟より先に学校指定の制服とブレザーに着替え、通学路につく事にした。

真水の通う私立木賀高校は、木賀川から丁度北東の約一キロ地点に位置する。

登校終了が8時30分なので、8時に家を出れば十分に間に合う計算だった。

もう既に通い慣れた通学路を歩き進めると、前方に同じ木賀高に通う連中の中に見慣れた人影があった。

「北沢！」

「ん？河戸か……。」

声を掛けると、いつもどおりの一定の反応をしてくる北沢。

彼は、北沢誠司。

中学からの付き合いで、真水の親友である。

見るからに真面目で堅物な男で、見た目以上にかなり計算高く行動し、遅刻など一度も見た事が無い。

昔、そろばんを習っていた所以か、頭の中に行動日程が刻まれ、その通りに動いているとは、当人の弁だ。

きっちりした奴だが、きっちりとしたマイペースでもある。我が道

を行っているとも言つ。

父親から兄弟まで警察関係者ともなると、こつこつ性格になるのかもしれない。

この男と合流できたのなら、真水の遅刻は万一にも無くなつたわけだ。

無論、当然ながら人生には予想外のことは当然の如く起こるのである。

木賀高校正門前に差し掛かった頃、またまた見覚えのある人物が、誰かと人目を気にせず言い争っていた。

「あれは・・・国木田か。」

北沢が目細めて呟く。

言い争っているのは、国木田宗一。

真水が高校に上がってから友人であり、剣道部所属のクラスメイトである。

さっぱりして気の良い奴だが、喧嘩っ早くて時々始末に負えない。見た目どおりに野生児で、頭の出来がよろしくない。ウエルクの爪の垢を煎じて飲ませてやりたいくらいに。

俺と北沢と国木田で、所謂定番の三人組をやっている。

高校に上がった時に席が近かったのもあるが、今では気が置けない友人だ。

「で、言い争っている・・・否、迷惑がられているのは、吉中か。」
北沢がぼそつと呟くように言った。

彼女は、吉中朝美。

国木田と同じく剣道部所属だというのを真水は聞いたことがある。
身長180センチある国木田より顔ひとつ下ほどの身長だから、160センチ程度。

見るからに華奢だが、一度部活動で国木田と試合をして、完膚なきまで打ち倒したという。依然悔しそうに国木田が話していた。

短く切り揃えられた日本人特有の黒髪に、ウェルクとは違う鷹のように鋭い目。それが堪らないという男子が多いらしい、真水には理解できなかったが。

美人ゆえに男子に人気がある故に告白されたという話を聞くが、叩き返されることばかりだと言う。

「火中の栗を拾う道理も無い、行くとしよう。」

北沢は冷淡にそう言った。

北沢は無駄が嫌いな性格らしく、友人なのに平気で国木田を見捨てるようだった。

もつとも、北沢は一度国木田の喧嘩っ早さで損をしたので、自業自得と言ってしまえばそれまでだったのだが。

国木田の視界に入らないように正門から入る。

最後に真水が一度だけ国木田の方を見ると、なぜだか吉中朝美と目が合った。

キンコーンカーンコーン。

「遅刻決定か。」

真水と北沢、上履きを履いて教室に入る寸前に、お決まりのチャイムが鳴った。

なぜか、朝のこの時間だけ予鈴が無くて本鈴なので、断罪の通告は如実に表される。

………コーン、カーン、コーン。

丁度、真水と北沢が己の席に着いた時である。

ガシャ！！

最後の鐘の余韻が消え去る直前、怒れる無表情を湛えた吉中が教室に入ってきた。

ギリギリ、セーフ判定である。

程なくして、国木田宗一が教室の扉を開けた。

「へえッ！へえッ！、せ、先生！！」

「遅刻だ。」

しかし、先に来ていた担任の稲木は無情だった。

「それで、結局何事だったのだ？」

朝のホームルームが終わるまで机で突っ伏して燃え尽きていた国木田に、北沢がわざわざやってきて問うた。

「おおお、誠司。実はな……」

救いを求めるかのように、国木田は顔を上げた。

真相は、記す事すら億劫な言い掛かりだった。

「お前が悪い。」

「同感だ。」

国木田の隣の席である真水も呆れながらも言った。

何でも、近々剣道部は大きな大会の予選を控えているらしい。しかし、吉中はそれに参加しないらしい。何でも、家が忙しいからとか。

国木田の奴は剣道部の若手で一番の実力者の吉中が不参加なのが許せないらしく、どうにか説得を試みているうちに口喧嘩に発展したそう。

「真水までえ……」

「北沢、一時限目は日本史だったな。」

「ああ、もうすぐ予鈴だ。」

情け無い声を出す国木田を無視して二人は授業の用意を始めた。

「河戸くん。」

二時限目の終わり。

購買部が始まる時間を見計らって昼飯の調達に向かう途中の廊下、吉中朝美に呼び止められた。

彼女は腕を組んだまま両目に怒りを宿し、怒り心頭のご様子だった。

「吉中か、国木田のことは災難だったな。」

用事が無ければ話をするような間柄でも無いので、真水は一步下がって人当たり良い苦笑いを浮かべてそう言った。

「ええ、いい迷惑よ。親友のあなたから深く言っておいてほしいわ。」

吉中は結構ハッキリとモノを言うタイプだったようだ。

「ああ、悪く思わないでくれ。あれは熱くなりやすいだけで悪気はないと思うんだが。」

「これで三度目だから言ってるの。次は再起不能にするって言っておいて。」

「……なるほど。」

どうやら、国木田と吉中の間には浅からぬ因縁が有るようだ。

きっと国木田は吉中に負けたのが悔しくて何度も再戦しているんだろうなあ、と真水は思った。

言いたいことはしっかり言って、吉中は去って行った。

「さて、と。もう今日の昼飯は期待できないか……」

学生たちが殺到しているいつもの購買部を思い浮かべ、真水は深々と溜息をついた。

結局、購入できたのは何の因果か、野菜サンドと牛乳だった。

国木田には吉中の伝言を伝えないという嫌がらせで報復する事に決定し、北沢と机を合わせて3人で昼食を取っている。

「そう言えば国木田、全部活動が休止になるのは知っているか？」と、突然に北沢がそんな事を言った。

「ああ、昨日顧問の片井から聞いた。何でも、人攫いが流行ってるんだって？」

「猟奇殺人もな。上流区の隅の方で昨晚もあったらしい、鈍器のようなもので全身をずだずだそうだ。」

我が校はスポーツ系の部活が弱くて良かったと喜ぶべきか・・・」

「そうだなあ。野球部もほとんど形式だけだし、去年はサッカーも地区予選で大敗して帰ってきたらしいし。」

初耳だった。

「それは、本当か？」

自分は帰宅部も良いところなので、部活の方とはともかく、そんな事件が多発している事もだ。

「今のところ、犯人は分かってないらしいがな。」

まあ、共通点は上流区で行われている以外、全くわかってないけどな……」

そう言つて、肩を竦める国木田。

「河戸は知っているだろうが、俺の親兄弟は警察関係者だ。

親父に自衛と現状を知る為に聞いたが、分かっている事は俺たちとまるで変わらないようだな。」

「おいおい、それってマジかよ。」

二重の意味で驚かれた国木田。

真水は頷くだけだった。

「俺も友人を亡くすのは惜しい。暗くなつてからの行動は控えたほうが良いだろう。」

そう言つた北沢の言葉は、高校生にしては重々しい重圧があつた。

これからはニュースに目を配ることを肝に銘じた。

「帰つたぞ、ウェルク。」

結局、その日は一時間繰り上げで帰宅。

家に帰つて来れたのは三時半頃だった。

市内が同じ状況なら、ウェルクの通う中学校も三時前に終了しているはずだが……

「……ウェルク？」

その日、ウェルクは夕食の時間にも帰って来なかった。

第一話 日常の予鈴（後書き）

前々から改定は考えていました、しかし、タイミングが無かった。ブログの方で楽しみにしていると仰ってくれる方々がいたので、改定の投稿に踏み切りました。続編も停滞気味ですし、心機一転、初心に帰ってやりたいと思います。

第二話 非日常の本鈴

満月。

魔術史を紐解けば、かつての世界の月には横一文字の線が入っていたと言う。

その所為か、月の神秘性は著しく低下し、満月に行う儀式魔術の多くが使用不可能となっただけらしい。
原因は諸説有るが、最も有力なのは隕石が横切った際に抉れたとされている。

この世界には、神秘であふれている。

科学万能時代であるこの二十一世紀に於いても。

その原因は、世界の裏側、歴史の裏で暗躍する魔術師の存在である。彼らは、約一千年前に、滅んだ自らの世界を見限り、魔力の使い方も殆ど知らない“原住民”と、歴史的文化的符合が多く、緑溢れるこの世界にやってきたのである。

想いや意思が力になる世界。“イメージピア”。

それが、かつて魔術師たちが捨てた星であり、そう呼ばれたものは捨て去られてから書物にされてからである。

そして、“地球”。

魔術師たちが逃げ込んできた、技術が神秘を凌駕した世界。否、逃げ込んだ当時はその限りではなかった。

むしろ、11世紀の地球から見れば、イメージピアの住人の文明は凡そ、500年は進んでいたのだ。

魔術やそれに伴う技術の流出による産業革命や、急激なエネルギー消費や公害に、この地球という星が耐えられる保障など、ありはしないのだ。

むしろ、以前の失敗での教訓を生かすため、魔術師の指導者は魔術やそれに類する神秘の秘匿に努めた。

全ては、魔力の枯渇を防ぐために。
己ら魔術師の存続の為だった。

それに、折角異世界まで自分の世界を捨ててまでやってきた開拓地を、見す見す原住民に食い潰されては堪らない。
だが、魔術師たちは謙虚であった（と、書物では伝えられている。現実をみるとホントかどうかは怪しい）。

魔術師たちは、飽くまで移民であり、寄生虫に過ぎない。

人類の存続こそが命題なのだ、と魔術師の指導者は言ったそうだ。

当時から今も変わらない魔術師の指導者の名は、リュミス・ジェノウィーグ。

齢にして三千を超えるらしい、その世界で最強の名を欲しいままに

した魔術師の、唯一の弟子である。

彼女は、イメージピアの生き残り五百人を引き連れ、巨大な建造物と共に地球にやってきた。

その建造物こそ、彼女の師の命令で設立した、魔術の存続と保全を目的にした“魔術連合”の総本部だったのである。（以降、“本部”とだけ表記する。）

彼女はその組織の指導者たる『盟主』だったのだ。

その“魔術連合”の成り立ちは、今は割愛する。

まず、地球にやってきた彼女らは数百年、魔術師の育成に励んだ。衰退した魔術の復活。自らの地盤を固めるために心血を注いだという。

自分たちの世界から持ち込んだ、図書施設に収容されている魔導書を厳選し、完璧な管理の元にその術を伝える。

幸い、地球の原住民は豊富に存在する魔力の使用法どころか、存在すらも知らないようなので、これの独占に成功。

そうして、魔術師において魔術とは何たるか、と言う問いに。

汝、究極を求めるべし、と概念的に刷り込むまで、二世代も掛かった。

そうだった十二世紀頃には、ヨーロッパ辺りに魔術師を少数派遣する事を検討していたその時、事件は起こった。
否、起こっていたのを知ったのだ。

彼女の師、『黒の君』こと、ウェルベルハルク・フォーバードの知識が散在していたのだ。

リュミスは彼に問い詰めたところ、暇つぶし、と返された。

あるところには魔導書として。

あるところには凶悪な魔具として。

あるところには災厄の根源となる代物も有ったのだ。

更には、彼曰く、地球とイメージピアの時間の経ち方は違うらしく、現在より過去にも少しずつ彼は魔性の道具をばら撒いたらしい。

当時、リュミスは異世界移住に師が妙に協力的だったのはこの為だったのか、と絶望したらしい。

それは、幾百幾千にも及ぶ、時限爆弾のようなものだった。

使い方を誤れば、世界が滅亡するような物も幾つもあったらしい。

ただし、どれも全て、持ち主にふさわしい人物でなければ使用できないようになっていた。

なっているのだが、それでも危険なものには変わらない。

しかし当時、拠点にしていたヨーロッパでは魔女狩りが横行。

全て無傷で回収したかったが、とてもではないがこうなってはとうしようもない。

それらの可能な限りの回収、及び、不可能なら破壊を彼女は配下の魔術師達に命じたのである。

だが、15世紀になると、カトリック教会が正式に異端審問に魔女狩りが加わり、回収は困難を極め始めた。

原住民の強烈な抵抗は、魔術師達に大きな動揺と思想の分裂を齎した。

元々二つだった派閥が、更に幾つにも分裂したのだ。

派閥同士の衝突や合併を繰り返し、ようやく三つに収まった。

魔術の特性から名を取り、

神秘の秘匿を尊重し、自然の維持を続けようとする、傍観的な“代用派”。

世間に魔術を認めさせようとする強行的な思想を持つ、実力重視な“流用派”。

そして、リュミス・ジェノウィーグが纏める勢力。
中立と妥協で二つの派閥を抑え、許可と断罪を下す“両立派”が存在する。

そして、近代兵器と科学の発達により魔術の必要性を極端に失った20世紀。

魔術師達は、派閥同士の睨み合いを両者に深い悔恨を残したまま凍結する事になった。

産業革命時に何らかの介入を果せば、結果は変わったかもしれないが、魔術師は世間の情勢に極端に疎い。

リュミスの政治的手腕が三流だったのが拍車を掛けた。

消費型社会の概念は、“代用派”から過激派を生み出し、それを鎮圧させるのに手間取ったのも悪かった。

結局、魔術師達は、過去の教訓を何一つ生かせぬまま、二十一世紀を迎える事となったのだ。

なんとも、皮肉な話である。

以上、大まかなこの世界の裏側の歴史である。

なぜそんなことを長々と語ったかと言つと、

「今日も、この時間が来ちゃった・・・。」

吉中朝美は、“代用派”に属する魔術師だからである。

“本部”には非常に珍しい、日本人魔術師の彼女は、ある日、多大

な恩あるリュミスに約二カ月前に直々の依頼を受けたからである。

曰く、

ジャパンの木賀市に、異常魔力反応を確認。

“WFコレクション”である可能性が高く、早急に回収、もしくは破壊せよ。

魔力反応レベルからして、貴女では手に負えないだろうから、応援を順次投入する。

先だって現地に潜入し、現状の監視をしろ。戦力が整うまで、一切の戦闘を控えよ。

簡単に言えばそんな感じだった。

要は、役に立たないから周囲を見張って調査しておけ、ってことだ。

魔力の反応から非常に厄介な代物だと判断され、長期的な派遣が決定されたのだ。

未熟な彼女に白羽の矢が立った理由は、現場が日本で、彼女が日本人だったから都合が良かったからだ。

それに、彼女は元々日本に帰ってきてどこかに修学する予定だったのだ。

その予定が変更され、任務と言う形になってしまったのである。

とある事情で、普通の日本人だった朝美が魔術師となったのは紆余曲折あったが、この依頼をリュミスに恩を返す為に朝美はこの仕事

を二つ返事で受けた。

朝美自身も実力で自分を選んだのだとは思っていなかったが、逆に、成功させれば認められるチャンスでもあるのだ。彼女は意気揚々と母国へ帰還した。

そうして、高校生として私立木賀高校に入学した朝美は、現地の潜入に成功し、疑問も疑いも持たれる事無く周囲に溶け込む事にも成功したのだ。

快調な滑り出しだった。

だが、打ち倒す、もしくは回収すべく敵の反応は微弱で、魔術に携る者が辛うじて“嫌な予感”、と思う程度の魔力しか発していない。それが、この木賀市の上流区一帯ほぼ全域に。

朝美が探查系の魔術が得意なら話は違ったのだろうが、これでは適当に歩き回って遭遇するのを待つしかない。

多少無理をしても行動は出来るが、応援を待つて対処するのが冷静に判断し、日々犠牲者が出るのを齒噛みしながら待ち続けた。

勿論、警戒は怠ってはいない。

月の魔力が最も活性化する深夜12時から2時まで、油断無く見回りをしているのだ。

それでも、満足な成果は得られない。
ある意味当然とも言える。

能力的に、朝美と相性が悪いのだ。

言ってしまうえば、敵の方が朝美の方を避けているのかもしれない。

「まったく、ふざけんじゃないわよ。」

舐められている。それも、完全に。

悪態付いても状況は変わるはずもなく、
その時。

諦め掛けた

「来たあッ！！！！」

待ち侘びた敵が出現したのを悟った。

「まさか！！！」

12時を回っても、ウェルクは帰って来ない。
脳裏に、北沢の言っていた言葉が反芻する。

人攫い、**猟奇殺人。**

最悪の、予感だった。

真水は苛立ちながらテレビを付けてニュース番組を探した。少しでも安心を求めての行動だった。

しかし、現在報道されているのは、東京で父親を殺して逃げた少年を探して警察が捜査しているということぐらいだ。

「ああ、もうッ!!」

真水は不安が最高潮に達し、堪らず外へ駆け出した。

そして、時間は現在に戻る。
真水は現実逃避から戻り、異世界での出来事のような光景を目にした。

絶え間ない金属音が響くあそこで、何かと何かの接触による火花が散っていた。

今の時代なら、アニメでしか聞く事の出来ない音だった。それよりずっとリアルで、済んだ本物の音だった。

そして、そこに居る怪異も、都会ではお目に掛かれない生物だった。

一言で言えば、巨大な熊だった。

ただ、誰の目が見ても大人しそうとか、死んだ振りが通用しそうな形相ではなかった。

赤い両目が爛々と獰猛に輝き、眼前の全てを薙ぎ払い、叩き潰さんと暴力を顕現していた。

だが、真水はそこに見とれていたのではない。

その怪物熊と相対し、一步も引かずに交戦している人間が居るのだ。半分程しかないの身長を駆使し、攪乱して、接近して、切り伏せる。剣の形をしているだけの“鉄の塊”を両手で持ち、俊敏を武器にして戦っていた。

そう、彼女を真水は知っていた。

「吉中？」

非常識な事なのに、簡単に飲み込めたのは、今の彼女がどこかウエ

ルクの醸し出す不思議な雰囲気にあつたからだ。
今の彼女は、闇夜に忍ぶような黒衣のローブ姿で、手には鈍器になりそうな鉄の塊がある。警察に見つかれば職務質問は確実だろう。しかし、当の本人は怪物熊と戦闘に夢中らしく、真水の事などまるで気付いているようではなかった。

ブウンー！！

丸太を振るつたような音を立て、空振りする怪物熊の腕。そんなの初めからお見通しだと体を低くし回避した吉中は“鉄塊”を斜め上に振り上げ、虚しく空を切った巨腕を斬り捨てた。

良い判断だ。

強力な攻撃力を誇る腕を切り落とせば、自分の身に降りかかる危険が軽減するし、相手の攻撃方法も制限される。

何より、片腕を失うとバランスが取れなくなるのだ。大勢は決したようなものだった。

無意味に突貫し、ダメージを与えるだけの戦法ではなかった。

一方、真水はよくあんな得物で敵が斬れるな、と混乱のあまりそんな関係の無いことを思っていた。

クガガアアアアアアア！！！！

凡そ、生物が放てる悲鳴ではなかった。

朝美はそのまま無慈悲に怪物熊を一刀両断した。

「なんだ、あれ……」

思わず、真水は呻くように呟いた。

斬られて噴出されるはずの血など、その怪物にはまるで無かったようであり、断面は奇妙な瑠璃色に発光していた。

先ほど斬り捨てられた腕の断面もそうであり、まるで、この世の生物ではないような印象を受ける色だった。

「誰ッ!？」

暗闇の中、その瞬間に初めて朝美が真水に気づき、振り向いた。なんと言葉を発してよいか決めあぐねていると、真ッ二つにされた怪物熊の片腕が、ピクリと動いたのだ。

強烈な既視感のような物に襲われ、思わず叫んだ。
危ない、と。

危険を察知した吉中の行動は迅速だった。

「“ ”」

一瞬過ぎて何を言ったか分からなかったが、早口言葉で何かを呟き。

「うあ……」

思わず驚いてしまうほどの現象が起こったのだ。

吉中の両手にある“鉄塊”が勢いよく燃え上がり、振り向きざまに火炎放射器の如く焼き払ったのだ。

超高熱の火炎剣だった。

見事な剣捌きだった。

賞賛のひとつでも送ってやりたい。

まさに、魔法であつた。

だが、怪物熊を焼き捨てた吉中は、次の瞬間ビクリと震え、真水の方に向き直り。

「もう一体!!!」

そう、朝美が悲鳴に近い叫びを上げた瞬間、激烈な違和感が真水にも襲った。

狭い行路を三次元的に高速移動しながら移動するそれは、豹やチーターに似た姿をしていた。

だが、やはり理性を感じられない闘争本能に満ちた赤い両目が、異様だった。

「くッ!!」

苦々しげに朝美が前に出て迎撃しようとするが、それは愚策だ。

機動力が脅威の敵は、足を止めさせてから攻撃するに限る。

無意味な攻撃はおろか、強力な防御手段が無ければ、だたのたのたかない。
何かしら牽制してから攻撃に移るべきだったのだが、後の祭りだった。

「あぐあー!!」

朝美の必死の斬撃は虚しく空を切り、突撃してきた猛獣の一撃をまともに受けて吹き飛ばされた。
声を上げる暇も無い、一瞬の出来事だった。

「吉中ッ!!」

叫び声を挙げた時、目の前には既存の形状を逸脱した巨大な口を広げた猛獣が迫っていた。

それは、軽く人を一人丸呑みにするくらいいけない大きさだった。

喰われる。

真水は、足がすくんで崩れ落ちた。

分かりやすい死の具現に、これ以上無いほど簡単な感想を抱いた。
あまりにも非現実的過ぎて、今度は恐怖を感じる暇も無い。

だが、その瞬間は永遠に訪れなかった。
一瞬、辺りが昼のように明るくなったかと思う閃光が猛獣を貫き、

目の前に迫っていたそれは散りのように消えた。

「あれ？兄貴じゃない。」

振り向くと、いつものように人を小馬鹿にしたような態度で真水を見下ろすウェルクが居て。

「こんな物騒な時期に、

こんなところで何してるの？」

それは、こっちが聞きたかった。

『この世には、認知されてないだけで恐るべき神秘や怪異が存在する。』

いつだか、ウェルクがハードカバーを読みながら呟いた言葉である。

『知っていたとしても、それを拒否することは可能だが、しかし、一度知ってしまった時点で拒否する事は死に等しい行為である。』
いま思い出しても、恐ろしい言葉だった。

『人は、どんな状況でも選択する事が出来る。例え其れが強要でも、事実上不可能でも、それを拒否する意思が存在する事は出来る。』
それは、これから起こることを予見しているような、そんな言葉だった。

『死を恐れてはいけない。』

知ることに目を瞑り、死ぬ為に生きる事こそ、真の恐怖である。』

今思い出しても、何とも身勝手な言葉だった。

第三話 魔術師協定

誰かの声が聞こえる。

「つーか、なんで俺が背負うんだよ。」

「だって僕じゃ身長足りないじゃん。そうすると、彼女を引きずるはめになるけど。」

「あーもう、わかったよ、女の子でも一人背負うのって大変なんだぞ!？」

「あー!! 兄貴ってば女性に対して重いとか、目え覚ましたら彼女にそう言ってたって言っちゃあー。」

「こんのクソガキ!! そんなこと言ってるねーから!!」

「・・・ったく、俺は別に鍛えてる訳じゃないただの高校生だったのに。なんでこんなことに・・・」

何か言い争っているようだった。

「（ねむ・・・い。）」

その時、彼女の意識は完全には覚醒しなかった。

「……気持ち悪い。」

吉中朝美は揺れていた。

何かに覆い被さるようにしているのは分かるが、何故今の状況なのか、全く記憶に無いと言っても良い。

「目が覚めたか？」

河戸真水の声で、徐々に何が起こったのか思い出していく。

負けたんだ、と心の中で呟いた。

己の油断が招いた結果だった、と悔しくて彼女は歯を噛みしめた。

「ああ……私は。」

どうやら、朝美は真水に背負われていることに気付いたようだった。

「兄貴、手伝うよ。」

微量な魔力の消費行為。

詠唱と共に行われたそれは、実行されると微かな浮遊感を味わう、奇妙な状態に置かれた。

更に、気分が悪くなった。

「ああ……ありがとう」

真水の戸惑ったような声が聞えたが、そんな事は朝美には気にならなかった。

気持ちが悪い。

乗り物酔いが激しい朝美だが、人に背負われて酔うなんて聞いた事

も無い。

「ねえ、お姉さん。聞きたい事があるんだけどさ、立ち話もなんだからそつちの都合無視で来て貰うよ。」

「なに、悪い話じゃないよ。情報って言うのはいつの時代でも有用さ、交換するのは悪い事じゃないよね。」

「傲岸不遜で一方通行な要求だが、理に適っている。」

「まさか、断るなんて事ないよね？君たちはそうやっていつも損をしてきたんだ。だから」

「ウエルク、失礼だろ。」

「真水が眉を顰めて、ウエルクを諷めた。」

「はいはい・・・」

「くすくすと笑うウエルクは一切の負い目を感じていないようだが、それ以上、何も言う事は無かった。」

「ほどなく、河戸家に到着した。」

「水を一杯飲み干し、不調だったのが呪文ひとつで嘘のように消し飛ばせ、朝美は言った。」

「どうやら彼女は脳震盪を起こしていたようだ。」

「『どう言う事なの？この地に根付いている魔術師が居るなんて聞いてないわよ。』」

「俺はその魔術師つう胡散臭い職業、今さっき始めて知ったばかりだぞ。」

刃のような鋭い瞳を向けられ、肩を竦める真水。

更にその後、治療するとか言っただけで気分悪そうだった朝美を、ウェルクは瞬く間に直して見せたのだ。

手品やドッキリにしては、少々手が込みすぎている。

「ああ、実は僕、魔法使い始めたんだ。」って、あんな化け物見なければ冗談としか思えなかったぞ。」

「まあまあ、まだ火を灯すのに成功して4年のキャリアしか積んでいない。」

それに先代なんてあったものじゃないから、魔術師としては低位の中の低位、最弱の部類だけだね。」

「冗談……。この家に張られている破邪結界は相当な物よ。」
それは、真水にも初耳だった。

「三流だね。これくらい、術式と魔力で後は丁寧に時間を掛ければ素人でも出来る。」

それに、どうしても必要だったからね。」

ウェルクはそんな事を言いながら、朝美を見た。

「じゃ、教えてもらおうか。」

この時、朝美はこいつ本当に年下の子供なのか、と思ってしまった。

「WFコレクション」？」

「魔術に携るものなら、誰でも知っている大魔術師……」

『黒の君』ことウエルベルハルク・フォーバードが作ったと言われている魔具の事よ。」

そんな物がこの町のどこかにある、と朝美は言った。

「あー、家にもその人が書いた魔導書の原本が幾つか有るよ。勿論封印処理は施してあるけどね。」

「な、なんですってえ！！！」

バン！！と、テーブルに手を叩いて立ち上がる朝美。

「ど、どうした！？」

あまりに大げさに驚くので、真水は瞠目してそう言った。

「彼の著書なんて、殆どが“本部”大図書館に寄贈されていて、時々市場やオークションでバカみたいな値段で写本が出される程度なのに、なんでこんな所に……」

崩れ落ちるように座りながら、朝美はそんな風に呟いた。

「……そんなに危ない代物なのか？」

「暴走すれば、ね。神秘が記された本には、それ自体に神秘が宿るらしい。」

特に、彼が書いたという本はみんな古くて年月の蓄積という神秘が

追加されているから、相当に強力な魔術媒体になるんだよ。」

「ああ……。」

言いたい事は分かる、と言う態度で何となく分かっている振りをしながら、真水はウェルクに相槌を打つ。

ウェルク曰く、魔術とは“代用”と“流用”の技術なのだという。

自力で魔術を発動できない未熟な内は、魔術を使用する為に必要な媒体　つまり、魔術媒体が必要となる。

ようは、杖や魔導書などで経験や技術を“代用”するのだ。

車を動かすのにガソリンが必要のように、魔術はガソリンを魔力という半万能な力で代用する術なのだ。

人が歩いて体力を使うのも、魔力を用いて移動するのも同じ。ただ、過程と燃料がことなる。

例えば、人間が魔力を使い、車と同じような結果を齎すようにする。魔術とは、そういうものなのだそうだ。

魔術師も高位になると、魔術媒体がその実力を上乘せできるようなるから、より強力な物を媒体にした方が良い。

だが、もし、並みの魔術師なんか遥かに凌ぐ代用品があるなら、

どうなるか？

小学生が一気に大学生になるようなものだ。
手にした瞬間、大抵は暴走する。

「WFコレクションは、大抵はそう言った物よ。物を言いすらする強大な魔導書。」

理解不能な力で人を狂わせるマジックアイテム。そして、何かのきっかけで動き出す、動力炉ならぬ“魔力炉”を内蔵した自動式の魔具。」

「大魔術師も迷惑な物を作るな。確り管理して欲しいよ。」
朝美の説明に、真水は溜息をついた。

「聞いた話では発見されただけでも、その数は600ほど。殆どが破壊する事を余儀なくされ、一割ほどは回収されたそうよ。」
なぜ、破壊する事を余儀なくされたのかを聞くほど、野暮ではない。聞くだけで恐ろしい代物だ、破壊するしかなかったのだろう。

「私は“魔術連合本部”から、その“WFコレクション”の破壊及び回収を依頼されてこの地にやって来た魔術師。専門は、まだ基礎の段階ね。黒魔術を専攻したいと思ってるけど。」

「く、黒魔術って、怪しげだな・・・。」

今だどこか信じられない気持ちが残ってるのだろうか、真水は微妙な表情でそう言った。

「そんな不気味なモノを見るような目で見ないでよ、私も五年前までは同じ立場だったんだから。」

「そ、そうなのか？」

「そうよ。だから河戸君の気持ちはよくわかるわ。」

溜息を吐いて、その時のことを思い出したのか朝美の表情に影が差

した。

「・・・魔術師って、いつもあんな化け物と戦ってるのか？」
場を持たせようと、真水はそう言った。

「殺し合いならしょっちゅうやってるわよ。最近は鳴りを潜めているけど。」

三つほど派閥が有ってね、『盟主』が中心の“両立派”以外は水面下で争っているわ。」

「数百年前の記録が書斎にあったから知ってる。かなり泥沼なんだからってね。」

と、ウェルクが口を挟んだ。

「ええ、私は参加した事は無いけど、昔は大規模な戦いになったのも少なくないそうよ。」

「とんでもない連中だな、魔術師って。一体、なにが嬉しくて殺し合いなんかしてるんだ？」

真水の問いに、朝美は呆れたように言った。

「詳しくは知らない。ただ、必要技術の奪い合いとか、貴重な物資を巡ったり、反りが合わないからって理由が殆ど。」

「まあ、しょうがないよ。魔術師は人間の中でも一際業が深いからね。」

「純粋な研究者じゃなくても、高みを目指すのは魔術師の本能みたいなものだからね。」

魔術師にもいろいろなタイプがあつて、それは何十もあるらしい。朝美みたいな戦闘専門や、ウエルクのような学者のような知能派など。

そして、朝美はウエルクを見て。

「勿論、度が過ぎれば、『盟主』直属部隊の“処刑人”が処断しに来るから、覚えておいた方が良いわ。」

「参考までに聞くけど、吉中みたい強いのか？それに、さっきから『盟主』って言うてるが、偉い人なのか？」

前者はともかく、どんな人物か知らないのに様付けで人名を連呼されても理解のしようが無い。

「私が強い？ そんなの“本部”の皆に言ったら笑われるわよ。

私の実力なんて、本当に下から数えた方が早いわ。

有名なのは二つ名が付くし、そう言う連中は魔術師を続けるのなら嫌でも知る事になる。」

朝美の目は、遊びならさつさと手を引けと言っていた。

「……………」

無言で、真水はウエルクを見た。

「止める気なんて無いよ？」

「言うと思った、だから止めないよ。」

「流石は兄貴、理解が早くて嬉しいよ。」

にこにこと無邪気な笑みでそんな事をいうウエルクに、真水は複雑そうな表情で見っていた。

「『盟主』はこの国で言えば総理大臣がもっとも近いかもね。最高指導者だから。」

私の知る限り、最高の魔術師よ。不老不死だって言われていて、“魔術連合”の設立から生きていらっしやるらしいわ。」

「不老不死って、本当に死なないのか？」

不老不死と聞いても、真水にはいまいち実感が湧かない。

日本人の平均寿命でさえ、ここ最近で80歳に達したところだ。

「知らないわよ。だけど、途方も無い時間を生きて来たらしいのよ。不老なのは確かだわ。」

と、力強く朝美は言い切った。

その言葉には、非常に強い羨望と憧れがあった。

「そんな事より、取引しない？」

しばらく、魔術師について質疑応答を繰り返していると、ウェルクが飽きて来たのか、そんな風な子供らしくない台詞を吐いた。

「取引？」

朝美が怪訝な表情を見せた。

「ここ最近、この町が物騒になってきたからね、僕らはただ静かに過ごしたい。」

だから、その“WFコレクション”とやらの破壊を手伝って上げる

よ。

僕は君のバックアップをする、君は敵を切り伏せる。如何？ 悪い話じゃないでしょ？」

「まあ・・・確かに。」

正直、ウエルクの申し出は数年ぶりの雨のように嬉しく、数百万の宝石のように魅力的だ。

応援がいつになるか分からないし、威力重視の黒魔術は人外相手に非常に有効なのだ。

しかも、朝美から見てもウエルクは素人ながら魔力は十二分だったし、魔力の運用も術式の発動も問題は無かった。

素人が四年でこれなら、天才といっても、なんら差し支えない。

「だけど、敵は広範囲に渡って出現する。神出鬼没と言っても良いわ。

そして、気配も希薄で襲うだけ襲って雲隠れ。私もこの一ヶ月で今日始めて遭遇したのよ。」

朝美の言葉で、真水は被害が近隣の市内にも及んでいることを思い出した。

あの化け物が出たとして、のこの隣町まで行ったら被害者がバラバラ、では確かに意味が無いだろう。

彼女の話によると、やるだけやって化け物は消えてしまうようだし。

「効率を取れば戦力を分散する事になるし、探索系の魔術は燃費が悪いからあなたが使用できたとしても、その後に戦力となるのは無理がある。」

「僕はね、風属性の魔術は得意な方だけど、索敵する魔術はまだ未修得なんだ。」

「なにそれ、結局無意味じゃない。」

「やれやれ、と溜息をつく朝美に、ウェルクはにやりと笑って見せた。なぜか嫌な予感がした真水だった。」

「ただ、条件付だけど敵を僕らの周囲に出現させる方法はある。」
と、そうウェルクが言ったとたんに朝美は眉を顰めた。

「なにそれ、それこそ怪物を発生させている魔具を制御する様なものよ。」

何処に在るとも知れないそれを発見できればそれに越した事は無いけど、だったら初めから怪物を出現させなければ良いって話になるじゃない。」

「いやだから、とウェルクは前置きして。」

「絶好の餌があるんだよ。見た所、あれは半分くらい霊的な存在みたいだった。だったら、確実に喰い付くほどの超強力な。」

「そんなもの何処に・・・」

そんなものが有ったら苦労しない、と朝美は溜息をついた。

「そこ。」

ウェルクの指差す先には。

「お、俺か？」

真水が居た。

「そ。そもそも、この家に張っている破邪結界は兄貴のための物なんだよ?」

「そうなのか?」
初耳だった。

「そう。兄貴は先天的な“霊媒体質”で“魔力吸引能力者”。
ついで言うと、“霊体遮断体質”。悪霊とかそういう類を呼び寄せ、
霊体の侵害を無力化するヘンテコな体質っぱいだよ。」

「なにそれ・・・」
其れを聞いた朝美は啞然としていた。

「え、どういうことだ?」
真水は訳が分からず、困惑していた。

「一つ一つは時々見かけるけど、そんなのが三つも揃った人間なんて・・・とんでもない素質じゃない。」

「兄貴に魔術が向いていればの話だけだね。」
そう締めくくって、ウェルクは真水に向き直って言う。

「ねえ兄貴。絶対に兄貴に手を出させないと誓うから、罔・・・というか、護衛されてくれない?

魔術師達に恩を売つという損は無いと思うんだ。それに、兄貴の体質はとっても危険だし。」

「危険、という。悪霊に憑かれたりするからか?」
真水は霊媒体質と言うのは聞いたことがあった、時々テレビでそう

いう怪しい番組がやっているし。

「普通の霊媒体質ならね。だけど兄貴の場合は違う。

“魔力吸引能力者”と言ってね、別に特別な力じゃないんだけど、体質的に兄貴には空気中の魔力が周囲に絡まって、更に兄貴は霊媒体質だから面白くない現象が起こるかもしれないんだ。

ただ。兄貴は“霊体遮断体質”でもあるから、悪霊や邪霊を使つた呪術なんかは効かないんだけど、集まりに集まった悪霊ってね、ひとつの集合意識になって高位の存在に昇華し、化け物になる事があるらしいんだ。

そうだったら、実体を持つ事もあるし、周りにとんでもない迷惑が掛かる。厄介なコンボだよ。」

一通り説明すると、ウェルクは溜息をついた。

「兄貴を巻き込みたくないけど、魔術師の本部とやらから必要な道具さえ手に入ればもつと高度な魔具が作れる。

そうすれば、この家の結界を個人規模で常時発生する携帯できる魔具が作れるんだよ。

兄貴は、誰にも迷惑をかけずに済むんだ。」

「そう、か。」

最近、妙に大人びて来たのは、こういう事だったのか。

真水には、義弟がどこか遠い存在にいつの間にか成っているように感じた。

ウェルクは自分の為に魔術を始めたのだ、と。

ここ一ヶ月の寝る間も惜しんだ勉強も、今回絡んでいる“WFコレ

クシヨン”とやらに気付いて寝る間も惜しんで勉強していたのだろ
う。

なんて良く出来た義弟なんだろうか。

真水は内心感動していた。

ならば、それに報いるのも兄の勤めであろう、と真水は思ったのだ。
そう思うと、義弟に苦手意識を感じていたのも何だか馬鹿らしく思
えてきた。

だから、

「
分かった。俺はウェルクを信じよう。」

なんの躊躇いも無く、そんな事を言えたのだらう。

第三話 魔術師協定（後書き）

順調に第三話まで改定できました。

この調子まで最後まで行きたいと思います。改定作業は結構楽しいです。^^

当然投稿した奴を読み返したりするのですが、誤字や修正漏れがあったりで、恥ずかしい思いをしていますww

さて時間的に、今日はこれで終わりですね。
それではまた明日。

第四話 加速する物語

時間は数か月前にまで遡ることになる。

薄暗い闇の中、栗色の長髪を一括りした美女が艶やかな吐息を漏らした。

椅子の背もたれに寄りかかり、憂鬱と取って良いのか、喜びと取って良いのか、彼女は葛藤していた。

「ついに、苦渋に満ちた最悪の決断を実行する時が来ましたか・・・」

されど、彼女の理性はそう判断していた。

魔術師は己の行う行為に一切の私情と妥協を持つてはいけない。彼女が師から教えられた事だ。

現代の魔術師には通用しない思想だった。

師から通告された“それ”は、私情が半分、実務的な要素が半分だと、彼女は判断している。

成功すれば英断。失敗すれば事態は悪化。

人手不足ゆえに早急で有能な人材の確保が必要なのは分かる。
彼女は最近、魔術師の質が落ちてきたのを知っている。

だが、この判断はあまりにも急性過ぎやしないだろうか？
そう、何度も自問自答して、師匠譲りの涙脆さで泣き腫らした。

冷たい、冷たい、地獄の底のように冷たい場所を、彼女は師と共に歩いている。

ここには魔女が住んでいる。
冷たい魔術を持った魔女が支配し、管理している。

神話級大規模凍結封印魔術“コキユートス”。
それにより、ここには最初に数十人、今では二百人近くが放り込まれた、冷たい監獄だ。
人間どころか、この封印魔術にその名に関するに至った原因たる悪魔の王まで封印されている。

ここは魔術連合本部の最奥にある、殺してしまうに限るが、殺すには惜しい人材が、冷凍保存されている場所なのだ。

やがて、彼女と師はたどり着く。

氷の中で、死んだように眠っている、自分の姉だった女が居る場所

に。

彼女はやがて、唇が凍りつくような寒さの中で、口を開いた。

「千五百年くらい振りですね、姉さん。」

目の前には、裸体の死体が手術台に横たわっている。

彼女は、“それ”を理解する事は出来なかった。
否、嘗ては理解し、以心伝心と自負するまで至った。

だが、“それ”を理解する事は永遠に出来なかった。
なぜなら、“それ”を処刑したのは、
彼女なのだから。紛れも偽りも無く、

魔術師は己の行う行為に一切の私情と妥協を持つてはいけない。

師から受け継いだ精神は、皮肉にも己の師によって覆させられる事となる。

しかし、魔術の世界において、己の師は絶対ではない。

むしろ、
殺してその技術を奪い取り、更なる高みに
臨む事こそ、代々伝えられし魔術の後継者たり、己の師とそれに連なる先祖達への最大の敬意となるのだ。

そうになると、己の師は、彼女から見て大師匠への不敬者となる。
故に、
無能。そう、蔑まれている。

だが、彼女は知っている。
己の師は、有能ではないが、決して無能ではない。

むしろ、何千年も魔術師をまとめ上げている気概とその不屈の精神は、常人凡百のそれとは遥か逸している。
師はよくやっている。痛々しいほど痛烈に。

“ウェルベルハルクの弟子”と言うだけの理由で魔術師の頂点を押し付けられ、

不死者故に代替わりする事は無く、永遠に責任を押し付けられる最

高の傀儡だったのだ。

だが、押し付けた連中は身を持って、己の認識を改める事になった。
彼らは、ウエルベルハルクを伝説の存在として、
め切っていたのだ。 舐

今の彼女にすれば、彼らに失笑どころか同情の念すらも沸いてくる。

だって、

あれは反則なのだから。

大魔術を苦も無く無詠唱で連発し、世界中の人間に強制暗示を掛けられる化け物というか、人間の想像の範疇を逸脱して常識を嘲笑うようなとんでもない魔術師。

我が師でさえ、十全な準備を必要とする死者蘇生すらも即席で行える偉大な魔術師。

其れこそが、『黒の君』。

ウエルベルハルク・フォーバード、と全魔術師に名を刻んだ存在。

人の至る全ての極致に到達したと言われる彼の魔術師は、現在は音信不通だと言う。

まあ、数百年に一度、暇つぶし程度に連絡を取るような人なのだから、今更といえは今更だ。

彼が降臨した時代は、決まって魔術師の質が良くなる。

師と同じく不死者になるまで至った彼女は、それを持って痛感した。

身

一度、彼女は大師匠から賜われた一矢を放った事がある。
標的は、“それ”。

広域に分散した“それ”を一人も残らず射殺し、ある種の不死性を完全に封殺した魔弾を放った感触は何千何百年経っても忘れる事は無いだろう。

当時、最高位の魔術師だった“それ”ですら、ウェルベルハルクの実験台程度の存在でしかなかった。
その一矢の目の前にして、人間は生き残る事は不可能だった。

蚊を殺すのに大砲は要らぬ、とはこの世界のことわざだったか。

それを聞いた時には、泣きながら笑ってしまった。
是非、大師匠に教えて差し上げたい。

魔術師は己の行う行為に一切の私情と妥協を持つてはいけない。

それを歪なまでに実行し、大師匠しか至れなかった“万能たる究極”に最も近づいた魔術師。

彼女は分からなかった、自分は“それ”を“尊敬”しているのか、唾棄すべき不忠者だと思っているのか。

「
施術は完了しました。気分は如何ですか？ 我が弟子よ。」

我が師の声で、彼女は我に返った。
どうやら、忘我と思考の果てに居たらしい。

しかし、それが自分に向けられた言葉ではないのだと理解するまで、あと数秒必要だった。

もう一人、師匠に我が弟子と呼ばれる権利がある人間が居るのだ。

たった数分前まで、それは自分だけの物だった。

だが、たった今、死体に過ぎない“それ”から、人間へと戻った“彼女”には、その権利があった。

「最悪ね。我が師匠。ちょっと頭がくらくらするわ。噂どおり無能なのね。」

千五百年ぶりの懐かしい言葉は、彼女の摩耗した記憶を蘇らせていく。

涙が、出てきそうだった。

「それは否定しません。私は一人では何も出来ない無能者ですよ。」

それも、私に反旗を翻した、大量殺戮者の手を借りてしまわなければならないほどに。」

「冗談よ、師匠がすごいことはちゃんと知ってるわ。」

「……ところで、私はどれだけ眠っていたのかしら？」

彼女の胸の中に、どんどんと懐かしさが去来してくる。

「だいたい、千五百年くらいでしょうか。いろいろありましたよ。異世界まで来ました。」

「そんなに？ うーん、何だか状況がつかめないわね。」

ちゃんと言葉で詳しく押しえてくれないかしら？

頭の中に知識は入ってるみたいだけど、何か今の状態で整理できなくて。」

「それはあとでカノンに詳しく聞いてください。」

「分かったわ。」

師と“彼女”は、彼女のことなど無視して勝手に話を進める。

「あなたの無限の手を借りたい。」

知識は渡したとおり、あらゆる時代と技術に適応できるあなたにしか頼れないのですよ。

それに、あなたの研究を邪魔する者はこの世界に一握りも存在しない。

まあ、魔術とは代用と流用の技術、無能が万能の力を頼るのは自明の理でしょう。

私は度が過ぎなければ何だって見逃し、どんなことでも許す積りです。」

なんて汚い言葉なんだろうか。

「汚い言葉ね。」

彼女の思った事も、“彼女”は躊躇い無く言葉として発する。

「私は合理主義者です。司法取引と言うことですよ。」

我々にとって有益である限り、現代の魔術師は文句は言えない。

それに、この世界でなら、あなたは無敵の筈ですよ

？

「それもそうね。」

“彼女”は指を鳴らし、顕現させた衣服を纏って不敵に笑った。

「あら、貴女ってカノンよね？ あんなにちっちゃかったのに、大人っぽくなったのね。見違えたわ。一瞬誰だか分からなかったわよ。」

そう言われた瞬間、彼女の涙腺は決壊した。

「お姉、さまぁッ！！」

“彼女”を尊敬し、敬愛し、慕っていた最高の姉弟子だった頃。

怒りと絶望で狂ってしまった彼女を、処断せよ、と師に命じられる以前の微笑みに、彼女は絶えられなかった。

結局、彼女はどれだけ経っても嫌いになれなかった。

外道に墮し、邪魔者を一切の見境を付けずに皆殺しにし、あまつさえ彼女と自らの師匠に牙を向いて、結局最後には弟子だったと言う記録すら抹消された、“彼女”。

通った二つ名は、“ブラックトリガー”。

その名は、メリス・フォン・エルリーバ。

「さあ、師匠。“斬新的な革命”を始めるわ。魔術師の夜明けを共に見ましよう。」

当時、最高にして最悪だった錬金術師が、この世に蘇ったのだ。

彼女の復活によって、初めてこの物語が本当に始まりを迎えることになる。

そして時間軸は戻る。

夜が来た。

より文章的に表現するなら、闇の帳が下りて来たとでも言うべきだろうが、どんなに風流に言い表しても、そこに渦巻く邪念や悪意を覆い尽くすことはできなかった。

「うわぁッ！うわぁぁぁぁぁ！！！」

暗い町中の人気の無い道で、男は恐怖に震え、逃げ出そうとしていた。

「駄目ですわよ。逃げてしまつては。」

天使のような声色で、悪魔のように言葉を突きつけられる。

闇夜の奥に、人間の理解の範疇を超えた化け物が居たのだ。これで逃げるなという、奴の方がおかしい。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

男は悲鳴を挙げ、向かってくる化け物から必死に逃げ出した。

「あなたも魔術師の端くれでしょう？」

身の程が分かったのなら、大人しくあの世なりどこへなり行った方がよろしいではなくて？」

男は、魔術師だった。

それも邪悪に堕した黒魔術師、大して才能も無いのに“本部”から

無許可で脱出し、ただいま追手に追われている真っ最中だった。それくらいならまだ捨て置かれるくらいには、彼は小物だった。

魔術師の業界でも冷酷無情と知られる“本部”なのだが、雑魚を一匹捕まえるのに網を放るほど暇ではないのだ。

しかし、彼は自らの力を驕った。

その結果、悪魔を召喚しようと生け贄を集めて、何人もの一般人を殺害したのである。

それはいけない。割と何でもありな魔術師の業界だが、魔術と言う神秘が世間一般に、少しでも興味を持たれるような事態になつてはいけないのだ。

だから、殺す。徹底的に、殺し尽くす。

全員にとって、そう言う足を引っ張る奴は邪魔だから。

「まったく、なんで教会の連中の雑用なんか下請けしないといけないんでしょうね。」

聖職者なんて聖書片手にぴーちくぱーちく鳥のように喚いていれば良いでしょうに。」

『仕方なからう、我々は見逃して頂いている立場なのだ。こんな小物を相手にするほど、連中は人手があるまい。』

そりゃあ、こちらにお株が回ってくるというものだ。』

あるうことか、追手たちは逃げ回る男を余所に、雑談に興じていた。ホラー映画なら駄目だしを食らうだろうが、現実であるこの業界の悪夢を前にすれば、その恐ろしさはちつとも陰ることはないだろう。

男が生け贄の為に殺した人間は女と子供ばかりで、男は邪魔になって偶々殺しただけのが数人。

そうやって合計、11人もこの男は殺した。

そして、今日、男の命運が尽きた。

報いを受ける日が来たのである。

男は、敵の襲撃によって臆して逃げ出した。

“本部”が送り込んでくる刺客の恐ろしさは、誰もが知る所なのだ。

追手は、あるうことが男が先ほど仕入れたばかりの死体を使って、残虐な追跡者に仕立て上げたのである。

血まみれの男が起き上がって、鉈を振り回して、男を殺そうとしてきたのだ。

これを恐怖と言わず、なんと言えば良いのか。

「ヨクモオオオオオオ、ヨクモオオオオオオオオオオ！！！！！！」

絶叫を挙げて向かってくるのは、先ほど自分が殺した12人目の死体だった。

まだ温かい血を首からだくと流しながら、開ききった瞳孔がある目を見開かせ、人間とは思えない速さで男に飛び掛った。

もう死んでいるのだから、肉体がどうなろうと知ったことではないのだろう。

ありつたけの強化の魔術の反動で、ぷちぷちと死体の筋肉が干切れる音が鮮明に聞こえてくる。

「うわ、あああああ、助けて、助けてくれええええええ！！！」

だが、そんな身勝手な願いは聞き届けられるはずも無く。怨念に満ちた復讐者は、男に飛びかかって背中から押し倒した。

ふと、その時、男の目の前に一人の男が立っていた。古そうな背広姿で、背の高い中年の外人のようだった。

男は藁をも掴む思いで懇願した。

「助けて……頼む、助けてくれええええ！！！！！！！！」

「ふむ、助けて欲しい、か。どうする？ お前達？」

外人の男が振り返った先を見て、
殺人は更なる絶叫を挙げた。

ユルサナイ・・・

ユルサナイ・・・

『ロヂン、ロヂン……！』

呪詛のような言葉を呟く声は、
11。

まだ十に満たない少女、先日家庭を持ったばかりの若い女、目の前で妻を殺された男、 全て、この男が殺した被害者達だった。

それが全て怨霊と化して、地面を這って男に近付いて来ているのだ。

『だ、そうだ。残念だったな。』

外人の男は苦笑して、肩を竦めた。

だが、男は気づくべきだった。その外人には、足が無かったということ。

更に言えば、体が透けて見えているということに、気づくべきだった。

彼は、亡霊だった。

そしてその瞬間、怨霊たちが死体によって抑え込まれた男に、まさに殺す勢いで押し迫った。

「うわあああああああ！！！！！！があッ！！あがぁ・・・が・・・」

まだ生暖かい死体が、男の首を締め上げて悲鳴を挙げる事すら許さない。

尚も、被害者たちの呪詛は続く。

『シネ。』

『シネ。』

『シネ。』

『シネ。』

『シネ。』

『シネ。』

『シネ。』

『シネ。』

『シネ。』

『シネ。』

『シネ。』

『シネ。』

『シネ。』

『シネ。』

『シネ。』

『シネ。』

『シネ。』

[illegible]

『シネ。』 『シネ。』 『シネ。』 『シネ。』 『シネ。』
『シネ。』 『シネ。』

『シンデクレヨオオオオオオ。オレタチト、イツシヨニイイ！
！！！！！！！！』

その怨霊の怨嗟の絶叫と共に、男は恐怖に暮れて実に呆気なく事切れた。

「クッ」

その一部始終を見ていた少女が居た。
優雅な物腰で死んだ男に近寄る。

美しい金髪の持ち主であり、色白な肌や喪服のように黒塗りのイブニングドレスは、この場で唯一の生者なのだがどこか浮世離れしていた。

この死者達の宴にはふさわしくない儚さが有った。

彼女は口元を抑えたが。

「あは、ははははははは、なんです？ あれは。

恐怖で死にましたわ。仮にも魔術師として魔術を学んだ身でありながら！！

あははは、あはは、くふふふ……」

堪えなくなつて笑い出したが、下品だと自覚して自重しているのか、彼女は必死に目に涙を湛えて笑いを堪えていた。

『そう言つてやるな、ルーシア。』

精神防護を呪詛で剥がしてこんなB級ホラー映画のような状況に陥れば、な。』

シヨック死ぐらい当然だ、と亡霊の男は苦笑しながら言つたが、そこに同情や哀れみなど一切籠つていなかった。

「さあ、もう済みましたでしょう？」

恨みを晴らしたのだから、さつさと成仏なさい。」

彼女はそう言つて、一言。

「『消滅せよ。』』」

何の慈悲も無く、恨み言を言い続ける死霊達を霧散させた。供養ではなく、さんざん利用した拳句の使い捨てだった。

『やれやれ、これで四人目。お前の實力ならこれ以上は不要だろう。』

「そうですね、数だけ居ても防腐処理が大変ですし。」

「……そろそろ、目的地に向かいましょうか、師匠。」

パチン、と指を鳴らすと、今し方死亡した男がムクリと起き上がった。

「たしか・・・キガ市とか言いましたか？この国の原住民の言葉は概念が多すぎて理解が難しいですわ。」

「それも文化なのだろう。先に派遣された魔術師もこの国の出身だという。」

全く、時代も変われば魔術師も変わるといふ事か。」

亡霊の男はどこか感慨深いように頷いた。

「まさか原住民ですか？

全く嫌ですわね。連中が我々を真似ようが、究極の彼方に到達するなど不可能ですわね。」

「さて、な。そればかりは分からないな。

あの『盟主』リュミスもパツと出の魔術師らしいがね。」

亡霊は少女の典型的な貴族型魔術師の施行に苦笑せざるをえなかった。

「ふん、あのような品性の無い無能者がなぜ本部の最高指導者なのでしょうか、甚だ疑問ですわ。」

「俺は良くやっていると思うがなあ。」

「やる事成す事が殆ど裏目に出ていて何を言いますか。長生きだけが取り得の老女でしょうに。」

どんだん毒を吐く少女に、男は呆れたようにこう言った。

「この業界では、気に入らない相手でも耳触りのいい言葉を言わなければならぬ時が必ずやってくるだろう。」

ルーシア、君のようなちゃんとした家柄の魔術師なら、まず魔術の知識より年上を敬うことを知るべきだ。特に“魔導師”連中に嫌われたら目も当てられないぞ。

私の知り合いの知り合いが“魔導師”の逆鱗に触れて報復に遭い、無残に死にざまを晒したと聞いたことが有る。」

「・・・・・・・・」

『おや？さつきまでの威勢は如何した。小娘め。』
くつくつと笑う亡霊の男に、彼女はふん、ともう一度鼻を鳴らして。

「死者は黙ってなさい。この国のことわざによれば、死人に口なし
と言うそうではないですか。」

『使い方を完全に間違っではいるがな。』

亡霊の男から逃げるように歩き出す少女に、二体の死体が付いて行く。

『やれやれ・・・・・・・・』

肩を竦める亡霊の男も、少女に憑いて行く。

物語は、もう止まらない。

第四話 加速する物語（後書き）

結構内容を変更した話です。

昔書いた話とはいえ、自分の構成力の無さと突然の展開は今よりずっとひどかったと痛感しました。
私も初心に戻れています。

第五話 魔術師二人の夜道

「今日はありがとう、助かったわ。」

「いや、礼ならウエルクに言ってくれよ。」

河戸家玄関先、そろそろ帰ると言い出した朝美に、外まで送るよ、と真水が言った為、このような場面が出来上がった。

あと、夜はくれぐれも一人で歩くな、とウエルクに釘を刺され、神妙に頷いた次第である。

「そう言えば、これと一緒に運んでくれたのもあなたよね、助かったわ。」

そう言つて、朝美は真水が鉄塊だと思っていた物を持ち上げた。

それを至近距離で直視した真水は、悪寒が走った。

見覚えが、無い。と言うか、その存在に今気付いた。

今までどこにあったのか、不気味で真水は聞くことはできなかった。

その鉄塊は見れば見るほど、ただの鉄の塊に見えた。

一応、それは剣の形をしているが、十字に鉄を押し固めたようにしか見えない。

質感たつぷりで、重そうだが朝美は軽々と持っているが、正直に言えば使いにくそうである。

長さは、ぎりぎり片手剣として扱えることから、バスタードソードに分類されるだろう。

攻撃力は鈍器としては申し分ないだろうが、それを剣と称するのなら、全世界の刀匠を敵に回すようなものだろうけど。

持つ所である、柄の部分にも幾重に包帯が巻かれ、持ち易くなるような工夫までしてある。

“てつのつるぎ”とか、“ロングソード”みたいなRPG的に序盤で手に入れて中盤に至るより早く売る事になり新たな武器を買う足しにかなりそうにない奇妙な物体である。

それなのに、どうしようもないほど、この剣（便宜上、そう呼ぶ事にする）から生々しい声が聞える。

それは、錯覚かも知れなかった。

だが錯覚と自分を騙しきるほど、真水は自分を偽っていないかった。

鉄の塊が、真水を誘おうとしている。

曰く、こっちに来い、と。手にとって斬り捨てろ、と。殺させろ、と。

殺意を物質化させれば、こんなものになるのだろうか、と違ってしまうほど嫌な剣である。

「ああ……あなたにも分かるのね。

この剣は普通じゃない。

“魔剣”なのよ。」

どこか自重気味に呟いた朝美は、怨敵を見るように目を細め、魔剣を見下ろした。

魔剣。なるほど、これ以上しつくり来る名称が浮かばないほど、それは的確な表現だと真水は思った。

それを剣と言うには、あまりにも魔性的過ぎた。

ただの魔法の道具と言うには、あまりにも無骨過ぎても居た。

「これには、絶対に触れてはダメ。特に、あなたは。」

「肝に……銘じておく。」

こくり、と真水は頷いた。

触れてしまえば、どんな事が起こるか分からない。

真水の本能が訴えるのだ、それに近付いてはならない、と。

「驚かせるつもりは無いけど、俺もウェルクも、そんな物を運んだ覚えが無いんだ。

お前達が言う魔術媒体なのかもしれないが、俺は嫌な予感しかしない。個人的に、捨てた方が良いと思う。」

俺は、何も知らない素人の余所者が厚かましいとは思ったが、そう言わなければいけないと思って、寒気を感じながらそう口を開いてそう言った。

すると、背筋が冷たいものを流れた気がした。

それを聞いた朝美は恐ろしいほど無表情で、

「そう」

と、言ったのだ。

闇夜で日本人形にいきなり遭遇して直視してしまった時に生じるような、そんな恐ろしさを真水はクラスメイトに初めて抱いた。二の句が継げられなかった。

そして、彼女は真水の目を見て更に言葉を紡いだ。
無表情なのに、悲しそうにも見えた。

「あなたの予感はずしいわ。正確過ぎるほどに。
言ってしまうば、私が魔術師になったのは“これ”が原因なのよ。
これは、この世にあつてはならない代物なのよ。だけど、捨てる訳にはいかない。

これを御せる人間はこの世で私ただ一人の、そんな無責任なこと、私には出来ないのよ。」

その強烈な決意は、一体何処から来るのか。

初対面よりマシ程度の面識しかない真水には分からないことだった。

「分かった。だが、無理はしない方がいい。

今更だから卑怯かもしれないが、今回の件に俺が関わる条件に、“無理をしない事”を付け加えてくれ。

どうやら魔術師は疑心暗鬼に陥りやすい職業みたいだから、いざと

いう時はウェルクにでも頼って欲しい。

あいつは口が悪い事に目を瞑れば、いろんな分野で出来すぎる弟だからな。きつと役に立つさ。

任せてばかりで悪いと思っっている。俺も何か出来れば良いと思っっている。

護衛されるばかりの身分だから、口だけしか出せないけど。」

「そんな事は無いわ。ありがとう。」

朝美の表情に、微笑が戻った。

「あなたは、私と同じ“代用”タイプの・・・そうね、死霊魔術師ネクロマンサーに適正があると思うわ。

最も死に近い魔術だからパツと出の魔術師なら覚悟が要るけど。だから無理しようとして魔術に手を染めないでね。

特に、連中にろくな奴は居ないわ・・・まあ、あなたになら頼れる気がするけど。」

「はは、今度ウェルクに聞いてみるよ。」

笑えない。

ネクロマンサーなんて、殆ど悪役か、ゾンビとかを繰り出している構図しか想像できない。

そんな風に、真水が呟くと。

「それは“流用”タイプの死霊魔術師よ。こっちはもっと性質が悪い。

死体を平気で魔術的に改造したり、純粹な死霊を悪霊に変えて使役したり、とんでもないやつらよ。

呪殺や幻覚系統にも秀でていて、強力な死体や亡霊が居れば居るほど強くなる。」

それは先ほど朝美が教えてくれた。

“代用”タイプの魔術師が、魔力をガソリンなどに見立てて魔術を行使するのと違って、

“流用”タイプの魔術師は、使い捨ての消耗品を使用して、魔術を行使する。

“代用”タイプの戦闘は安定した攻撃力と機動力が売りで、生存率が高い。

“流用”タイプの利点は、前衛なら瞬間的な攻撃力と破壊力、後衛なら少ない魔力消費での強力な魔術行使。

だが、欠点が顕著で、魔術品が無くなると役立たずになるのは前衛後衛共通している。

特に後衛は、品切れは即死に繋がる大事だと言う。

だから、“代用派”は基本的に研究者が多く、“流用派”は戦闘者が多い。

だが、どちらも片方のタイプしか魔術を使う魔術師はまず居ない。使用する二つのタイプの魔術の触媒の利権の下に群がる連中が二通りいたから、今の今までそう呼ばれているだけなのだと言う。

まあ、真水は日本人ならではの柔軟な思考の下、ファンタジーのゲーム的に考えれば理解するのは難しくなかった。

勿論例外はあるらしい。

「私、教会の騎士のお偉いさんに会ったことあるけれど、教会の連中の魔術は殆どが“代用”タイプなのにバリバリの戦闘派の代表格

らしいわ。反応実験の為に“流用”タイプの魔術を行使する必要に迫られることも多いから、お金がポンポン吹っ飛ぶこともしばしばって話も聞くわ。」

と朝美が先ほど語っていた。

真水の想像では魔術師つてのは超然としているイメージがあつたが、案外結構俗っぽくて大変な職業らしかった。

それから一通り、死霊魔術師について言うと、朝美は、あッ、と声を上げ、数秒考え込むと。

「まあ、自衛できる事に越した事はないけど、やらないという選択肢もある。

魔術師なんて、人の血肉を食って生きているようなものよ。日常を選べるだけ幸せなんだから、慎重に行動してね。」

何だか急に早口になって、朝美はそう言った。

「本当にありがとう。今日は実に有益な一日だったわ。」

「そうか、それは良かった。じゃ、また明日学校で。」

「そう言えば、そうだったわね。学生の身分を忘れるところだったわ。」

じゃあな、と朝美と別れ、玄関先から家に入ろうとすると。

「ウエルク？」

が、横開きのドアを開けてこっちを見ていた。

「まだ夜は寒いんだから、早く入りなよ。こんな真夜中に長話なん

てするもんじゃないし。」

嫌味の中に労りを込めた一言。

「ああ、そうだな。」

真水は、そんな義弟に微笑んで頷いた。

闇夜道、朝美は静かに帰路に着いていた。

昔で言う牛の刻だと言つのに、そこに夜の闇に対する恐怖は微塵も無い。

それは、真に暗黒を跋扈する者達の正体を正しく知る者達の一人であるからだろう。

「原住民が居るからと、随分と言いたい事を言ってくれましたわね。人殺しの後継者のくせに。」

魔剣“ソウルイーター”の後継者、ヨシナカ・アサミ」
更なる暗がりの奥から、静かな声が響いた。

朝美は息を吸って、呟いた。

「この腐臭。死体を香水に使っているっていうのは本当なのかしらエセ貴族？」

“デッドウォーカー”の弟子、ルーシア・シエムフィード。

「暗がりから、イブニングドレスを纏ったまだ幼さが残る少女が現れた。」

「応援が来るとは聞いていたけど、とんだミスキャストね。」

闇から登場してきたルーシアを認め、朝美は吐き捨てるように呟く。

彼女はルーシア・シエムフィード。

魔術の名家シエムフィード家の一人娘であり、父親が“流用派”の首領だからすごく偉そうで朝美は大嫌いな相手だった。

「それは私の台詞ですわ。なんで貴女のような原住民のサルがこんな所に居るのかしら？」

「もしや、かつて這いまわっていた故郷の山の臭いでも思い出してホームシックでも患ったのではありませんか？」

「おほほほ、とか言いながら無駄に上品に笑うルーシア。」

「刺々しいと言うレベルじゃない毒舌だった。」

「はあ、と朝美は溜息を吐くだけだった。」

「なんですかその表情は。本来なら、わたくしのような高貴な人間

と話す機会などありませんのですから、歡喜して咽び泣いて物乞いのようにわたくしの足元に跪いたらどうなのでしょう？」

「誇る物が家名だけだと自慢話が短くて楽そうね。」

「なんですって？」

まさしく、カチンときたというような表情で、ルーシアは朝美を睨みつけた。

「聞いたわよ。だって、貴女、実績なんてロクにないんでしょ？」

あゝあゝあゝ、“本部”のお貴族さまは本当にお偉いございますからねえ、いやいや、わたくしめ如き愚民は頭を下げるだけでございます。

・・・私はあんたみたいな奴の顔を拝まなくて清々するけれどね。

目の中のルーシアに負けない嫌味だった。

当然、朝美の目の前に居る彼女は、可憐とは程遠い表情になった。

「死人に口なしとはこの国の言葉でしたね。

丁度、死体の口を開かせる実験をしようと思っていましたの。名誉ある実験体は貴女ですわ。さあ、さっさと自らの息の根を止めなさい。」

「顔に皺が寄ってるでございますわよ、お貴族さま。若いうちに皺ができるとなかなか取れないらしいけど、あんたにはお似合いよ。」

『止めないか、二人とも！！』

一色即発の空気になったその時、二人の間に割って入る人物がいた。

『味方同士で争って依頼遂行に支障が出て見る。』

それが“本部”に知られたら、依頼元はそれが怨恨であれなんであ

れ、お互いにとって良いことなど一つも無い。』
くたびれた背広を纏った亡霊だった。

「師匠、邪魔しないでください。」

「どいてくださいカーレスさん、その女殺せない。」

両方からいっぺんにそう言われ、間に挟まれたカーレスと言う亡霊は溜息を吐いた。

この魔術師の業界でよく言われているが、この世には決して相容れる事の無いだろうと直感的に分かる人物が、凡そ3人は居るといふ。例えば、この二人である。

二人が始めて会ったのは、五年前である。

場所は、“本部”で開催された魔術師同士の社交パーティだった。

主催は、『盟主』リュミスだった。

それは所謂、貴族型の名家の魔術師たちに通知され、招集に近い形で数十の魔術師の家の人間が集ったパーティだった。

主役は、朝美だった。

と言うか、彼女のお披露目が目的のパーティだった。

何を勘違いしたのか貴族体質が染みついた魔術師たちは思った、なぜこんな原住民の小娘がこんな場所に来ているのか。

相変わらず『盟主』の行いは理解に苦しむ、と言つのが出席した貴族魔術師たち印象だった。

しかし、そこには『盟主』が直々に足を運んで、衝撃の事実が齎されたのである。

あの悪名高き魔剣、“ソウルイーター”がこの少女を宿主に選んだ、と。

その場は騒然となった。逃げ出す者も居た。それくらい、悪名が轟いていた。

伝説的な曰く付きの魔剣だったのだ、彼女の持つそれは。

その時、朝美は、どうせなら勇者の剣がよかったなあ、と他人事のように考えていた。

『盟主』がそのパーティを開いた理由は、顔見せと警告だった。朝美は“本部”の庇護下に置かれる旨を通知され、一切の手出しを無用だと。

そうでもしなかったら、伝説級の宝物を目にした欲深な魔術師たちは、朝美をバラバラに解体してじっくりと調べつくしたりしかねないからであり、『盟主』の配慮でもあった。

ただ、その配慮は朝美の為でなく、返り討ちに遭うだろう魔術師の為だった。

それで、パーティは最悪の空気のまま始まった。

当然ながら、誰一人として朝美に話しかける人間は居なかった。

と言うか、パーティの目的は既に達成されたので、朝美はさっさ帰っても良かったのである。

しかし、そんな彼女に近づいてくる人物がいた。

言うまでも無く、当時のルーシアである。

年が近かった、と言う理由で父親に様子を見てこいと言われた彼女は、朝美に堂々と近付いてこう言い放った。

「貴女みたいな原住民のサルに、魔剣“ソウルイーター”はふさわしくないわ、わたくしに寄越しなさい。」

と、当時から物怖じしない性格だった彼女の一言は、周囲のざわめきを一瞬で黙らせた。

そして、当時いろいろ有ってかなり精神的に参っていた朝美はこう言った。

「こんなの欲しかったらいくらでもあげるけど、絶対にあんたみたいなブスにはあげない。」

「はい？」

今まで何不自由なく蝶よ花よと育てられてきたルーシアには、その暴言は信じられないものだったらしかった。本当にこのサルは何を言ったのかしら、と十秒近く理解できていなかった。

そして、十五秒後に朝美の言葉の意味を完全に咀嚼しきって、

「こ、こ、こ、これだから、粗暴な地上のサルは。」

・・・く、口の利き方も、っし、知らないのですわね!」

その時は何とか淑女としての体裁を取り繕ったルーシアは怒りを呑み込むことに成功した。

だが、よほど我慢したのが表情に出ていたのだろう。

そんなルーシアに指さし、朝美が一言。

「変な顔。」

と、言った。

すぐに取っ組み合いの喧嘩になった。

その時朝美は知らなかったが、魔術師が魔術師に指を指すという行為は、呪い殺してやる、と言う意味が有るのだ。

地上では、失礼だ、程度の意味でしかないが、北欧の魔術にはガンドと呼ばれる相手を指さして呪う魔術が存在しているものだから、そこに込められる意味は重くなるのである。

口実を得たルーシアは、朝美の顔面を殴りつけた。

むかつ腹が経っていた朝美も、即座に殴り返してしまい、魔術師のパーティとは思えない物理的な喧嘩になった。

『盟主』もその騒動には頭を抱えたと言う。

結局、朝美が失礼を働いたことと、ルーシアの父親が『盟主』に頭を下げたことで両成敗に終わったが、悔恨は二人の中に大きく残ったのである。

その時は運良く、本気の殺し合いに発展はしなかったが、後々の為に互いの素性くらいは調べてある。

能力も、人種も、魔術師としての力も、派閥も、更には性格も思想も、
調べれば調べるほど相容れない。

まさに、魔術師の因果が殺し合いをさせる為に引き合わせたかと思えない巡り合わせだった。

それから度々、なぜか二人は顔を合わせることがあって、その度に口喧嘩が起こる。

その度にカーレスが場を取りなおして、何とか殺し合いには発展せず済んでいるが、その口喧嘩も回を重ねることにより過激になってきているのである。

このままでは抑えきれない、とカーレスは危機感を抱いていた。

『済まないな、魔剣の主。実体があれば殴ってでも言い聞かせたのだが……』

彼女の師匠である魔術師の亡霊は心底申し訳なさそうにそう言った。

彼の名は、カーレス・ネレフィス。

これでも生前はかなり腕利きの死霊魔術師だった、と朝美は聞いている。

死して尚、弟子に魔術を伝えようとする気概は朝美も一目置いているし、こちらはちゃんとした大人だから敬意を払っている。

『さて、本来なら腰を落着けてこれからの段取りを決めるべきなのだが……。』

「あら？ 荒事専門、泥被りはあなたで、後処理と周囲への隠蔽はわたくしの仕事。」

それでよろしいのではなくて？ まあ、わたくし一人で十分ですが、面倒ごとは任せようと思ひましてね。」

何処までも傲慢な言葉に、彼女の魂胆が見え透いている上にカーレスが大人の対応をしているので、朝美はもう怒る気力も沸かない。

それに、この相手とは決して分かり合える事は無いと理解しているからだ。

「いえ、こちらはこちらでやりますので、そちらはその馬鹿女が羽目を外さないようお願いします。」

と、学校で使い慣れた敬語を使って朝美は答える。

『確かに……。ルーシアとともに連携を期待するのは愚ではあるな。』

しかも、互いが互いの力を殺し合う相性の悪さもある……。敵に何か変化があるまで、それが良いだろう。』

「ちょっと待ちなさい。」

円滑な会話は、勿論と言うべきか、ルーシアに止められた。

「勝手に話を進めないで下さる？ 師匠。」

『そうは言っても、お前達が顔を会わせ、一度としてまともな会話が成立した事はないだろう？

ならば、互いに徹底的に無視した方がまだ、理性的だ。

少なくとも、真夜中とは言え、この街中で殺し合いに発展し、更に一般民衆に魔術を悟られたとあれば、処刑人の方々も黙ってはいないだろう。

ミイラ取りミイラになる、死霊を繰る我々には冗談にしても笑えないぞ。』

うぐッ、と師匠の正論にルーシアも言葉を詰らせた。

弟子が黙ったのを見ると、カーレスは朝美に向き直って言った。

『と、言う事だ。当面は不干涉。それと、差し支えなければ交戦状況を伺いたい。』

「敵の気配は非常に微弱。交戦回数は一度。

恐らく、出現物の消滅による魔力の削減で本体が出現するタイプでしょう。

頻度はほぼ毎日夜中に出現。二体以上の同時出現を確認。出現物は寧猛で好戦的。

数度から十数度、最悪百度以上の戦闘は覚悟した方がよろしいかと。

┌

淡々とした朝美の報告に、カーレスはその内容に眉を顰めた。

『ランクには未知数か。伝説級か神話の原型になった魔具かもしれ

ない、そちらも気を付ける。』

「それが本当なら、気を付けた所でどうにもならないでしょうけど。」

「この手の魔具の攻略に年単位の時間を要するなんて普通だ。」

ルーシアが嫌そうにしているのは、そんな長い時間、同じ町で朝美と同じ空気を吸うことが耐えられないからだろう。

「自動召喚の魔具で有名のならば、パンドラの箱やソロモンの鍵などのが挙げられますが、そんな単純なものではなさそうですね。」

「・・・それに、あれは大規模な召喚術式の魔具だったはず。」

少なくとも、使用用途が分かれば絞り込めるのですが、その辺は何か分かりませんでしたか？」

途中で口を挟んできたルーシアを無視して、朝美は踵を返した。

「それでは、ごきげんよう。」

最後の最後まで、嫌味ったらしい口調で朝美はルーシアにそう言った。

今来た道を引き返し、遠回りして、再び帰路に着く。

横切る事さえ、嫌だった。

「あ・・・ぐが・・・あの、おんなあ・・・」

『ふう・・・一大事にならずに済んだと、良しとするか。』

うちの姫さんが怒り心頭なのを嘆くべきか・・・』

どこぞの民家をともしれぬ壁をばこばこ叩く姿はとてもじゃないが、

他人に見せられない。
更に言えば、魔術師っぽくない。

あとで簡単な強化魔術を教えて適当な岩でも割らせて憂さ晴らしでもさせよう、と思いつつ、カーレスは今後のことについて考えた。

この地の死霊たちの動きは異常だ。

その動きが“WFコレクション”に関係あるのかと思って探っていたら、河戸家から出てくる朝美と見つけたと言う状況だった。

一箇所に集まろうとして、しかし、先ほど見た見事な破邪結界の効力で飛んで火に入る夏の虫状態。

故に、広範囲に死霊たちをばら撒いて索敵するという方法は断念せざるを得ないな、とカーレスは思った。

となると、

『あの少年が、此度のキーパーソンとなりそうだな。』
彼の資質を、カーレスは一目で見破った。

資質の違いこそあれ、完全にカーレスと同タイプの素養を持った少年。

或いは、とカーレスは嫌な想像をして、まさかな、と渋い表情になつて呟いた。

「そうですわー!!」

ふと、名案を思いついたかのように晴れやかな表情をしているルー

シアに、何だかカーレスは嫌な予感がした。

「それを回収しましょう。あの黄猿に使わせるよりずっと我々の方が有益に使用できますわ。」

『まあ、確かに相違ないだろうが、むやみやたらに嚇けては無意味だ。言葉で籠絡するのが楽なのだが……』

カーレスはルーシアをじっとりとした視線を送った。

この毒舌家に説得を期待するのは、ギリシャ神話に出てくるエロスの矢でも使わない限り無理だろう、とすらカーレスは思ったのだ。むしろ、関係が悪化して、恐らく協力関係にあるだろう朝美から報復される口実にされたら目も当てられないのである。

現地に住んでいる魔術師が居るとは聞いていないが、あそこにはあの結界からして必ず一人は魔術師が住んでいるはずである。そう、彼は考えていた。

朝美のような低級の魔術師でも、決して侮ってはならないのが、魔術師の常識だ。

魔術は相性と技術。力押しだけで勝てるほど、生温い世界ではないのである。

この世で最も恐ろしい魔術師は、
魔術師らしい魔術師
なのである。

己の魔術を躊躇い無く使用して省みず、そして、犠牲と血肉の海を作り出してでも目的の為に邁進する。

つまりは、そう言う魔術師だ。

カーレスは考える。

いや、むしろ。

『ルーシア、一度接触してみよう。揺さぶりを掛けるのは、死霊魔^{ネクロマ}術師^{ンサー}の得意とする所だ。』

これは、良い機会かもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6580y/>

三人の魔女 “夢の射影” 編

2011年11月21日17時23分発行